

神様の御心に従う信仰

創世記22章1～19節

2022年7月17日

松田 基子 師

私たちは聖書が告げる天地万物を造り、私たち人間に、命と使命を与えて、この世に送り出し、世界を導いておられる創造主なる神様を信じています。私達はその神様をいとも簡単に、

「信じている」

と言っているのですが、信じるとはどういう事か分かっているのでしょうか。世間では、

『困った時の神頼み』

という事が言われます。それは、

『神様と言うのは、自分の手に余ることが起こった時に、自分を助けてくれる、つまり、自分が願っているように、叶えてくれる存在であること。』

『そうであってこそ、信じる価値があると
思っている。』

これが信じることの本音ではないのでしょうか。

それは、まるで、自分が主人で、神様とは、自分の願望達成の、手段でしかありません。ですから、御利益が無ければ、次の神へと、次々に鞍替えをして行きます。その結果、多くの神々が必要となって来るのです。キリスト者は、流石に神様を替える事はしません。しかし、創造主なる神様が、どんなお方なのか聖書に聴こうとしないで、やはり、自分の願望を押しつけ、自分の願いが叶わないと神様に失望して疑うということが起こってきます。

神様を信じるとは一体どう言う事なのでしょう。神様はそのことを、聖書を通して示して下さいます。信仰の父アブラハムを通して、**神様を信じるとは、どう言うことなのかを、私達は知ることができます。** 創世記の12章1節で、神様は、ユーフラテス川下流のウルから、ハラン(シリア)へと移動してきたアブラハムに、

「あなたは生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める、祝福の源となるように」

と呼び掛けられました。

アブラハムは神様の召しに従って、75才でハランを出発し、カナンに向かいました。

神様はカナンでアブラハムに現れ、

「あなたの子孫にこの土地を与える」

と約束されました。その後、15章5節で

「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」

そして言われた。

「あなたの子孫はこの様になる。」

「アブラハムは主を信じた。」

「主はそれをアブラハムの義と認められた」

とあります。

しかし、アブラハムとサラは、年老いていくばかりで、子どもは与えられませんでした。そこで、サラは人間的な工作を考え、自分に仕えるハガルによって、アブラハムの子イシュマエルを生ませました。アブラハムはその時86才だったと記されています。サラの提案は一見正しかったように見えました。ところがアブラハム99才の時のことです。イシュマエルは13才です。アブラハムが、背丈も伸び、成長して行くイシュマエルを喜び、期待していた矢先に、神様はアブラハムに17章16節で、

「わたしは彼女(サラ)を祝福し、諸国民の母とする。諸国民の王となる者たちが彼女から出る」

と約束されました。

そこで17節をみますと、

「アブラハムは平伏した。しかし笑って密かに言った。

『百歳の男に子供が生まれるだろうか。

九十歳のサラに子どもが産めるだろうか』

とあります。アブラハムもまた、人間的な考えの限界を超えることが出来ないでいました。

しかし、神様は、

「神に不可能なことはない」

と、二人に奇跡を起こして、百歳のアブラハム、九十歳のサラにイサク(彼は笑う)をお与えになりました。アブラハムとサラにとってそれは喜びと、笑いに溢れる、神様の約束の真実さを実感する出来事でした。

21章6節を見ますと、

「サラは言った。

『神はわたしに笑いをお与えになった』

と、心から喜び、御名を讃えています。私達も、自分の思い、願いを超えた恵に浴すると、

『神様は生きておられる。

神様は素晴らしい』、

と喜びを語ります。その通り神様は、素晴らしい、生きて働いて下さるお方です。しかし、**信仰は、その様に、自分に利する事が起こる事ではありません。**それは神様の一方的な憐れみであることを、心に刻むべきです。人は自分に都合が悪くなると、すぐに不平に変わります。その典型がサラです。サラは自分の工作で、ハガルにアブラハムの子イシュマエルを生ませておきながら、自分の身からイサクが生まれると、イシュマエルが疎ましくなってきました。そこで、彼女はアブラハムに、21章10節で、

「あの女とあの子を追い出して下さい。

あの女の息子は、私の子イサクと

同じ跡継ぎとなるべきではありません」

と言っています。

この事は、

「アブラハムを非常に苦しめた」

と、記されています。ここで私達が、心に留めるべき事は、

『人間は、全き聖と愛であられる神様に

繋がり、神様に聞き従って行く所に、人間の使命があり、人間の真の喜びがある』、

ということです。その根本から離れた人間の考えや決断は、決して神様の御心の実を結ぶことなく、人間に苦しみを与えます。サラの人間的な跡継ぎ工作は、結果的に周りに苦しみを与えました。アブラハムも、サラの人間的な工作に同意した結果の苦しみを、負わなければなりません。しかし、そこで神様は確かに、その様な人間的な考えによる不信仰の結果を刈り取らせられますが、それは決して、悲しみで終わらせられる事はありません。神様は人間のその様な破れを繕い、癒して下さるお方です。

ホセヤ書6章1節で、

「ホセアは民に呼び掛けて、

『さあ、我々は主のもとに帰ろう。

主は我々を引き裂かれたが、いやし、

我々を打たれたが、傷を包んで下さる』

と言っています。神様はアブラハムの願いを受け入れ、ハガルとイシュマエルを助け、彼もまた、アブラハムの子孫として、一つの国民の祖となつて行きます。

一方イサクは、すくすくと成長して少年となりました。アブラハムとサラにとって、イサクは自分の命よりも大事な存在であつたに違いありません。幸せ真っ直中の家庭に、神様は激震を起こされました。22章1節で、

「神はアブラハムを試された」

とあります。

『エッ・・・神様は試されるお方なのですか』と問われるかもしれません。

『人間同志に於いて、相手の愛を試すなら、それはもう愛ではありません。』

そこには既に疑いが入っているからです。

しかし、神様は違います。相手を疑って試されるのではありません。神様が試みられるのは、

『信仰と愛の実力テストです。』

それは更に信仰の実力を引き上げる為のもので

神様はアブラハムにどんな問題をお出しになったのでしょうか。

「神が、『アブラハムよ』

と呼び掛け、彼が、『はい』

と答えると、2節に、

「神は命じられた。

『あなたの息子、あなたの愛する独り子、

イサクを連れてモリヤの地に行きなさい。

私が命じる山の一つに登り、彼を焼き

尽くす献げ物として献げなさい』

と命じられました。アブラハムは心臓が止まらんばかりに驚き、耳を疑ったことでしょう。

しかし、そこでなお、彼は神様に信頼しました。イサクは神様から、約束に約束を重ねて、何年も、何年も待って、不可能を可能にされた、神様の真実の証明として与えられた子どもです。

『今度は、その子どもを、お取りになる』父親として耐えられない事に、思われますが、この時のアブラハムについて、ヘブライ人への手紙、11章17節から、

「信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受

けていた者が、独り子を献げようとしたのです。この独り子については、

『イサクから生まれる者が、
あなたの子孫と呼ばれる』

と言われていました。アブラハムは、神が死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです」

とあります。

アブラハムには、神様は善にして、善をなさるといふ、絶対的な信頼がありました。とは言え、アブラハムの心は痛みました。その苦しみに直ぐに気付いたのはサラでしょう。アブラハムはサラに何も告げなかったでしょう。しかし、翌朝サラは悟ったに違いありません。創世記22章3節を見ますと、

「次の朝早く、アブラハムはロバに鞍を置き、
献げ物に用いる薪を割り、二人の若者と息子
イサクを連れ、神の命じられた所に向かって
行った」

とあります。ここにはサラの事は何も書いてありません。アブラハムから何も聞かされなかったとしても、アブラハムの苦悩を抱えた様子と繙祭を献げに行く準備に、犠牲獣が居ない事、まだ、少年のイサクが連れて行かれたこと、異教の神々へは、我が子が献げられることもある事から、サラは神様のアブラハムへの要求を悟ったに違いありません。サラの心は張り裂けるほどの苦しみに襲われた事でしょう。

サラはその時、自分の身勝手さで、アブラハムやハガル、イシュエルに苦しみを与えた事を悟ったかも知れません。人間は自分が苦しみに遭わなければ、自分が他者に苦しみを与えた事には気付かないのです。サラは物語からは隠されていますが、神様は彼女にも働かれたに違いありません。アブラハム一行は、カナン地方の南に位置するベエル・シェバからモリヤの地、後のエルサレムに向かって二日路を進みました。

4節に、

「3日目になって、アブラハムが目を
凝らすと、遠くにその場所が見えたので、
アブラハムは若者に言った。

『お前たちは、ろばと一緒にここで待ってい

なさい。わたしと息子はあそこへ行って、
礼拝をして、また戻ってくる』

と言っています。

岩波訳では、ここで、息子を

「少年」

と訳しています。イサクがまだ、少年であることを表しています。イサクは父アブラハムに全信頼し、微塵の疑いもなく、着いていきます。

でも、イサクは心に、少年らしい疑問が湧いてきました。7節で、父に、

「火と薪はここにありますが、焼き尽くす
献げ物にする小羊はどこにいるのですか」

と尋ねました。アブラハムは神様の命令を受けた時から、神様が何の目的で、イサクを献げよと言われるのかは、分からなくても、神様のお考えは、完全であり、神様はご自身にとって最善をなさるのであって、自分達はその為に生かされているのだから、全存在を委ねて、お従いすとの、決心で、ここまで来たのです。アブラハムはイサクを安心させるためではなく、神様に全てを委ねた結果、

「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の
小羊はきっと神が備えて下さる」

と答える事が出来ました。

二人は遂に神様が命じられた場所に着きました。

「アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、
息子イサクを縛って、祭壇の薪の上に載せ
た」

とあります。イサクは何の抵抗もしていません。泣き叫ぶ様子もありません。大人になってからのイサクは、他人との争いを好まず、穏やかな性格で、一人の妻、リベカを愛する、誠実な愛の人です。その性格は、アブラハムとサラに深く愛され、アブラハムの、神様に対する絶対的な信頼を肌で感じ取っていたに違いありません。イサクは少年ながら、その父に従いたかったのでしょう。そんな心が感じられます。抵抗しないイサクに対して、アブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとしました。

その時、天から主の御使いが、11節に、

「アブラハム、アブラハム」

と呼び掛けました。彼が、

「はい」
と答えると、12節に、御使いは言った。
「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった」
とあります。神様はここで、
「あなたが神を畏れる者であることが、今、分かった」
と言っておられます。

『いや、神様はなにもかも
ご存知ではないのですか』
との疑問を持たれるかも知れません。私達が知っておかなければならないことは、
『神様は私達人間を愛し、尊んで、決して強制されず、人間の自発性を待たれるのです。』
アブラハムは自分の全存在を賭けて、神様を愛し、恐れ従ったのです。信仰のテストに合格したのです。神様もこの時、アブラハムの本心をお知りになったのです。

アブラハムが目を凝らして見回すと、後の木の茂みに、一匹の雄羊が角を取られて動けないでいました。アブラハムはその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼き尽くす献げ物として献げました。アブラハムはその場所を、
「ヤーウェ・イルエ」(主は備えてくださる)
と名付けました。神様にとってアブラハムの信仰は喜びでした。神様はアブラハムに16節で、
「わたしは自らにかけて誓う、あなたがこの事を行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかったので、あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。」
「あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る。地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである」
との祝福の更新をお与えになりました。

この様に、信仰は神様への全信頼であり、自分の全存在を委ねる事です。何の条件も付けない事です。それはヨブ記の問いでもあります。

『利益も無いのに神を敬うでしょうか』
と言う声に対して、ヨブ記1章21節には、
「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」
とあります。また、ダニエル書3章18節には、
「たとえそうでなくとも、」
と言う信仰が示されています。
神様は、常にご自身の最善を求められます。しかし、それは必ずしも、私達の願いとは一致しない事がある中で、尚、神様に全信頼し、従う事が求められます。

しかし、愛ある神様が、主に信頼する者に、むやみに苦しみを与えられることはありません。神様は必ずヤーウェ・イルエ、さらに勝った祝福を用意して下さっているのです。
アブラハムの真の祝福は、イエス・キリストにおいて実現しました。アブラハムに少年イサクを献げることが禁じられた神様は、人類に真の祝福を与えるために、御子イエス・キリストを十字架に架けて、人類の罪を贖わせ、人類に救いの道を拓かれました。これ以上の愛と真実はありません。真の神様は、このお方以外に居られません。私達も、
「たとえそうでなくとも」との、
信仰を持って、命の与え主であり、死を超えて守り抜いて下さる創造主なる神様を信じ抜いて、生涯を送らせ頂こうではありませんか。

お祈りをいたします。
憐れみ深い天の父なる神様
罪深い私達に、あなた様こそ天地万物の創造主、私達を愛し、永遠の命に導いて下さる真の神様である事をお示し下さり、有難うございます。
あなた様に全信頼し、主は与え、主は奪う、主の御名は讃えられよと告白し、たとえそうでなくとも、唯一途に従って行くことが私達の使命です。どうか弱い私達を、あなたの強い御手で導いて下さい。
尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。